說林

歲末の辭

烏兎まことに匆々、春を送りて夏を迎へ、秋稍深くなりて冬來りぬと思ふ間に、何時しか年の暮は來りて明治卅四年は、はや逝かんとす。

年ごとに同じとはいへ、年の最後の一ヶ月はまことに忙かはしきもの、わけてお役所は事務の取り方附けに忙がしかるべく、實業家は一年中の損益利害の決算に忙がしかるべく、學生は學期試驗に頭を惱ませし、やがては溫かき故山に歸省の準備に忙がしかるべく、家々の主婦は歲暮のやりとりよりお寺への供物、偖は煤掃ひの用意に加へて將に來らんとするお正月の子供の晴衣の見立やら、凡そ何から何までに忙がしかるべく、而して氣速の媛君たちはこゝかしこに既に骨牌取りの練習に忙がしかるべく、要するに、こゝ一月といふもの男といはず女といはず、官吏といはず實業家といはず、敎師といはず學生といはず、如何にして行く年を送り如何にして來らん年を迎へんかの爲に誠に忙がしき月にてあるなり。

然れども、茲に行く年を送りて新しき年を迎ふるが爲に、吾等の最も忘るべからざる用意の一あり。徐ろに過去一年間に於ける一身の歷史を顧みて其精神界の進歩と退歩との決算勘定之なり。吾等の學問に於て、吾等の德操に於て、はた世の爲

に盡せる吾等の事業に於て、如何なる進歩をなし如何なる退歩をなしたるか、言を換ふれば、如何に吾等は人としての理想に近づきしか遠ざかりしかを決算し、かくて其差引勘定を考へて、更に對新年の策を劃すること即之なり。

過去一年間、大に進歩發達して、着々として理想に近接せし事を發見せんか、正に滿腔の喜を以て過去を送り、更に一層進歩の期望を來るべき新年に屬して之を迎ふるを得べし。若し夫れ事毎に失敗の跡を尋ね、事毎に退歩の證を得んか、將に大に奮つて來るべき年に向つて、恢復の望を屬して之を迎へ、かくして過去失敗の一年を以て、新年に對する良好の興奮劑として之を葬むるを得べからん。

此の如くんば、明治卅四年は逝けりとて、吾等は之が爲めに更に年一つを重ねて、一歩墓場に近く進みたりとて、若しくは總べて浮世の利害損得相償はざりきとて、敢て逝く年を歎げくを要せず、毫も去る年を惜しむを要せず、一年といふ毎年全じ樣に繰り返へす吾等の全生涯を劃する假想の一線は、やがて吾等をして人道に近つからしむる爲め、吾等をして理想を現實ならしむる爲めの、極めて有力なる一階段となるべし。

希くは年の終りに望み、總べての世俗的忙がしさを片付けて後一夜、吾等をして徐むろに吾等の過去一年間に於ける精神的方面の進歩發達の跡を尋ねしめよ、これまことに吾等が理想に近接すべき自身教育に於て最良の機會にあらずや。希くは吾等の子女をして子女相應の考を彼等が過去一年間の精神的方面に向けしめよ、これ誠に子女を

して理想を將來に高めしむる上に於て、教育上最良の機會にあらずや。

かくて一室一夜の團欒に於て、互に勵み勵まされ、以て春たち歸る新たまの卅五年を迎ふ、豈にまことに樂しきかぎりにあらずや。

行く年の惜くもあるがな增鏡　紀貫之
見る影さへにくれぬと思へば

罰に付て

（ミス、ヒユース談話の一節）

松村久子
林文子

皆樣は已に前號で、ミス、ヒユースを御存じでございませう。この女子教育大家の來朝は誠に喜ふべき事でございますから、有志の同窓生が時々集まりまして、色々教育上の質問をいたして居ります私共も幸ひ其末席に列ることを得て居ります。そうして先達ては或る人の問によつて、ミス、ヒユースの罰に付いての御考を伺ふことが出來ましたから、其一節を御紹介いたしませう。

ミス、ヒユースは左のごとく云はれました。

教師は子供の惡には二種類あるといふことを知らなければなりません。其一は一時かきりの惡いことで、今一は永久に惡いことであります。一時かきりの惡いことは之は團体の便宜のために一時定めた事例へは一定の時間に一定の場所に集まらなければならぬ、又は或る一定の時間内はだまつて居らなければならぬとかいふ樣な事を守らぬのをいふのであります。なぜ之等が一時の惡い事であるかといふと、たとへは物をいふといふ事は